

馬場孤蝶

更に衰えざりし

鷗外大人

更に衰えざりし鷗外大人

一

故鷗外大人^{うし}は、如何にも親しみ安い、暖な、率直な人であつた。誰に対しても同格でつきあうような態度で居られたのは、実に敬服で、吾々の企て及ばざるところであると同時に、又吾々の心して学ば無ければならんところであると思う。

大人は何時までも若き人であつた。従つて、何時まで

も進んで已まざる人であつた。大人は享年六十三であつたという。年齢から云つても、そう高齢ではない。大人危篤との報に接した時には、大に前途ある人を失うような気がして残念で堪まら無かつた。

更に又、吾々の若い自分から、文界に卓立して居られ、種々の意味で吾々の刺戟となつた大人の易箆えきさくは、時代の推移を急に吾々の胸に響かすところの晩鐘の如き感があつて、甚しく哀愁の念に堪えなかつた。

『舞姫』に『うたかたの記』に、美しき熱情と、美しき文体とを以つて、当時の文壇のフロントを占めて居た硯

友社その他の諸派の作風以外に、尚行くべき路の広きことを吾々に示されたのは、もう四十余年の昔である。

シュビンの『埋木』アンデルセンの『即興詩人』、共に翻訳には相違無いのだが、その文字の自由にして、豊富流麗なる点より云えば、全然創作とも云い得られるものであった。所謂る訳文もあれまでの名文になれば、原文との関係如何のごときは全く顧慮するに足らざるものである。恐らくは吾々に取っては、原文より以上に面白く読み得らるる訳文であつたらうと思わるる。殊に『即興詩人』の如きは、文字の点より云えば、原文に優ると

も云い得らるるかも知れぬ。

明治三十八九年の頃だと思ふのだが、大人は、

「予の若い時分の翻訳は、所謂る氣を負うて紙に臨む底のものであつたので、原文の各部分をそのまま伝えるという標準から之を判ずれば、固より欠点のすくなからぬものであるう」

という意味のことを或る人に話されたと伝聞した。果してそうであるか何うか、吾々は知らぬがフィッツジェラルドの『ルバイヤット』が、原文を離れて独立の価値を有するが如く、鷗外大人の『即興詩人』は全く独立の

価値を有する名文であることは疑いが無い。

文学的評論に独立の位置を与えたのも、鷗外大人であった。端嚴なる文字を自在に駆使して、正確なる論歩を進むる大人の評論は、全く時流を抜いて居た。その時分よりして起りかけつつあった文学的評論の向うべき路を指示したのは、大人の偉功と謂わなければならぬ。

要するに、三十代の鷗外大人が当時の青年に与えた指導は、その文体と精神とに於てであった。

クラシカルな精神とクラシカルな文体とで、当時の文壇に於て巨人の如き位置を占めて居られた鷗外大人が『そめちがえ』を公にせられたのは、全く人の意表に出でた観があつた。その物語の仔細は記憶して居無いが、事は花柳界の人々の間に起つた可なり粹なものであつたように思う。文体も後年の言文一致体と気脈を同うする余程砕けたものであつたように覚えて居る。

大人晩年の作では『雁』を甚だ面白いと思つた。大人

の学生時代の無縁坂あたりの雰囲気の豊に表れて居るのが、私には非常に興味深かったのだ。

既に定評ある大人の作品を此所に一々挙げるのも煩わしいのだから、それ等は此処では略することとするが、吾々の敬服措く能わざる点は、大人の如何なる場合に於ても綽々として余裕ある態度であつた。芸術は幾分現実の境地よりの擺脫はいだつより生るる。芸術は作家の心に於ける余裕を基礎として生れるのだ。如何なる事件を描くに當つても、その事件の程度とプロポーションを見失わ無いのは実に巨匠の心境である。

物に執すること無きは至人の心であるという。少くとも鷗外大人の晩年はそれに近いものであったと云い得られるであらう。

所謂るアソビの心持、人間の元気も勇氣も其処に根ざしたものが本当のものである。少くとも、我国の如き国に於て心豊に住み得る心のブオヤンシイは此のアソビの心持から生ずると思う。

明治四十二三年の頃でもあつたらうか、与謝野寛氏の外遊送別会の宴で、鷗外大人は隣席に居た私を顧みられて、その当時私が書いた二三の小説に就いて、

「君は背水の陣を布いてやって居るのだから、大に宜しい」

と、云われてから、

「書こうと思うものを三つ位書きかけて置いて、此方が倦きたらその次ぎ、その次ぎが倦きたら、又その次ぎのものというように、あっちこっち少しずつ筆を着けて居るうちに、何時の間にか、同時に三つとも出来上るものだ。君もそうしてみ給え」

と、話された。

「それは大人にして始めて出来ることなのだ。僕などは

書くことを一つ考えつくのが、やっとなんだものを」

と、私は心のうちで、思つて苦笑せざるを得無かつた。

三

鷗外大人は如何にも率直な、誰に対しても胸をうち開いて話をするように見受けられた人であつた。軍籍にあつた人でありながら、可なり遠慮の無い話をされる人であつた。

或る会合の食卓で、誰かが、日本人で外国人に対して

心持の悪るい程ルウドな言動をするもののあることを痛嘆すると、大人はご自分の軍服の襟を引張るようにして叩きながら、

「こ、これの連中がそういうことでは一番いけ無いんだ」

と、可なり力の籠った口調で云われたことがあった。

率直なる鷗外大人は、可なり勢好くものを云われる人であつて、自説を主張されるにも大分手強いところはあつたようであるが、それでも無理やりに押しつけるといふところは無かつたのであらうと思われる。

もう大正七、八年頃であつたかと思ふのだが、東京日日新聞で国詩というのを募つた時には、鷗外大人がおのずから委員長の格になつてしまつて、選が了つてしまつたと、字句を添刪したり、仮名遣いを正すことなどは、鷗外大人の発言がもとになつた。ところが当選者中の誰かの詩のなかにあつた「……するよりし方がない」という句に至つて、大人は「よりし方が無い」というのは正しい言葉で無く、謂わば下品な書生言葉であつて、「より外し方が無い」が正しい言葉であるのだから、そう改めるべきであると主張された。私はそれは鷗外大人の仰せの

通りではあるが、「よりし方がない」も兎に角今日では慣用語になって居るのだから、強て改めずとも宜しかろうとでは無いかという意を漏した。大人は矢張り「外ほかし方がない」でなければウソであることを可なり熱心に説かれたので、私は何ずれでも宜しいことなのでそのまま黙ってしまった。字句の添刪は鷗外大人ご自身で加筆されていたのだから、無論「よりし方がない」は「よりほしかたがない」と直されたことと思っていたのであるが、後でその詩が印刷されて、校正が私の手もとへ廻つて来たのを見ると、矢張り「よりしかたがない」という

元のままになって居て、「ほか」の二字は加えてなかった。綿密な鷗外大人が直し落しをされる気遣いはないの
で、それは何うしても、大人が私どもに対するご遠慮か
ら、直さずに置かれたものだと思わざるを得無かった。
私はその時鷗外大人の遠慮深いのに敬服の念を抱かずに
は居られなかった。

四

鷗外大人は三田の文科には関係の深いお方であった。

第一期の文科では美学の講師であつたと聞いて居る。

明治四十一年か二年かに、文科の拡張を行い、『三田文学』の創刊をするに当つては、鷗外大人は顧問として非常に尽力された。永井荷風氏を推薦したのは、大人が上田敏君と相談せられた上でのことであると伝聞する。

『三田文学』発刊の相談会には、慶応義塾の幹部数氏と鷗外大人、上田敏君、永井荷風氏の外に私は末席を汚したのである。具体的案はその時は確定し無かつたのだが、『三田文学』の発刊は大体に於てその晩の相談できまつたのであつた。

鷗外大人は日本文壇の大家として尊敬すべき人であつたと共に、三田の文科及び『三田文学』に縁故を有する吾々には忘るることのできない恩人である。

日本文学電子図書館

更に衰えざりし鷗外大人

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館